



## あの日、未来は明るかった ---。 慌ただしくもほっこりと、 現代人の郷愁を誘う “昭和30年代のマスカルチャー”

本稿は昭和、主に30年代の姿を、当時の品々などを中心に、なるべく正確に伝えようとするものである。

戦後の混乱も収まった昭和39年の東京オリンピックまでのほぼ10年は、新たな物も次々登場し、高度経済成長の波に乗って明日に夢と希望を託すことができた。現在からはバラ色にも見え、それが映画やテレビなどでもはやされるゆえんだが、時代考証の間違いや微妙なズレが目立つ。何より、当時の雰囲気を描き切れていないことがもどかしく、美化し過ぎているのも気にかかる。ちょっと、違うんじゃない?と思うこともしばしばで、当時の日本が誤って伝えられることへの危惧も、本著の執筆動機のひとつだった。

そこで本著では、ちょうどこの時代に東京の片隅で生まれ育った「僕」の感じたままの空気を再現することに、むしろ重きを置いた。現在では忘れられ語られることも無くなったような事柄や、負の部分にもあえて触れ、多角的な視点を心がけた。

その点で、「昔は良かった」式の他の類書とは一線を画す。振り返ってみればとんでもない時代だったと半ばあきれの反面、何が飛び出すかわからない玉手箱のような興奮があり、便利さとどのかさがほど良く共存してはいた。急速な機器の発達に人の方が追い付いていけなくなっているようにも感じられる現在と比べ、この頃が一番日本の身の丈に合っていたのではないかと思う。

折しも執筆中に起こった大震災に接し、その思いを強くした。それゆえ、この時代を



「週刊テレビ時代」創刊号(昭和35年4月3日発行、旺文社、定価50円)

生きて人々が心地良さを覚え、まだ生まれてもいなかった若い世代までをも惹きつけるのだろう。当時を懐かしみ、あるいはかつてこんな時代があったことを知って楽しんでいた

だければ幸いである。

この度ご縁あって、月刊FDIの掲載の運びとなりました。皆様よろしくお願いたします。

千葉豹一郎

### ① テレビの青春時代 (Vernal years of TV)

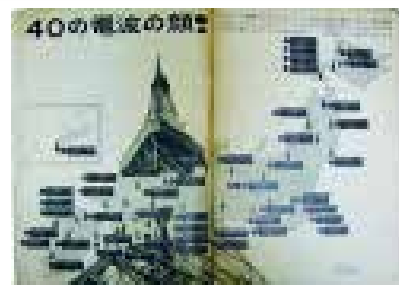
名作ミュージカル『雨に唄えば』(1952)を観てから雨の中を歩くのが前より憂うつではなくなったが、そのストーリーは映画がサイレントからトーキーに変わる際の大混乱を描いたものだった。日本のテレビも初期には混乱や珍事続きで、それはそれは面白いものであった。

昭和28年(1953)にNHK1局でスタートしたテレビ放送は、8月には日本テレビ、昭和年30年(1955)にはKRT(現TBS)が開局。新聞の番組表もまだラジオの方がメインだった。昭和年33年(1958)には電波塔である東京タワーが完成し、翌年2月にNET(現テレビ朝日)、3月にフジテレビが開局して、4月には皇太子の御成婚で一気にテレビが普及する。

しかし、「電気紙芝居、という嘲笑や、評論家の大宅壮一による「一億総白痴化」論のように、早くもテレビの悪影響を警戒する声も強く、テレビの現場にはいい物を作ってこれらを見返してやろうとする熱い息吹が感じられた。

2008年に映画リメイクされた『私は貝になりたい』や、『マンモスタワー』といった力作が立て続けに生まれ、生放送のためほとんどの映像が現存しない当時の番組の中であって、これらは奇跡的にビデオテープが残されている。特に『マンモスタワー』は、斜陽に向かう映画界と日の出の勢いのテレビ界を対比させ、来るべき時代を予感させる力作だった。

新たに勃興したテレビは古い因習に縛られる映画界とは異なり、自由な雰囲気と活気に満ちていたようだ。このころにNHKの現場にいた僕の母親の話からも、それはうかがえる。労働組合も強く管理のしっかりしたNHKのことゆえ、民放のように徹夜の突貫作業などはなかったようだが、そ



昭和35年「週刊テレビ時代」創刊号より

れでも深夜までみんなが立ち働いた。多忙な局員が短時間に食事が取れるよう、廊下にはホットドッグを始め、まだ珍しかった何種もの自動販売機が置かれていたという。NHKがまだ内幸町にあったころの話である。

後の人気番組『ひょっこりひょうたん島』のプロデューサーだった同級生の父親の自宅には、作者の井上ひさしがよく泊まりに来ていたそうで、家族的な雰囲気の付き合いもあったようだ。一方、技術的にも未熟で発展途上だったテレビの現場は、日々ハブニングの連続だった。

生放送なのでセリフの言い間違えは当たり前。長引いて尻切れトンボになったり、逆に早く終わってしまって「しばらくそのままお待ち下さい」という画面に切り替わるのは日常茶飯事だった。刑事ドラマでは、刑事たちが暴力団の倉庫を捜索中に「パンッ!」。どうやら上着の下の小道具の拳銃が、勝手に暴発したらしい。直後に撃ち合いが始まると、今度はさっきの刑事が取り出

#### サイレントからトーキー

無声映画(サイレント)から発声映画(トーキー)へ。無声映画時代は、字幕でセリフやト書きを表示したり、活動弁士と呼ばれる専門の映画解説員が内容をしゃべりながら上映するスタイルがとられていた。初のトーキー(部分)映画は1927年公開の『ジャズ・シンガー』(米/ワーナーブラザーズ)。

#### 「一億総白痴化」論

1957年、ノンフィクション作家で社会評論家の大宅壮一が生んだ、テレビ放送黎明期の流行語。テレビメディアが提供する低俗な番組をただ眺めるだけの行為は、国民の想像力や思考力を低下させる「週刊テレビ時代」創刊号(昭和35年という指摘)。

した銃が発火しない。焦って何度も引き鉄を引く悲壮なアップが映し出され、しまいには口で「パンッ!」。あ然としているうちにドラマは終わってしまった。題名も俳優も覚えていないのが残念だ。

あらかじめ撮ってあるフィルムのドラマでもいろいろあった。関口宏の実父、佐野周二主演の帯ドラマ『パパと歩こう』は、終わったはずが「局の者の手違いによりもう一度放送します」のテロップがかぶって最終回のやり直し。昭和40年代になっても、千葉真一主演の『くらやみ五段』は終了してからしばらく、朝の時間帯に番宣スポットが流れていた。

昭和年30代の中ごろまでは、午後の2時から5時ぐらいまでどの局も昼休みがあって、テレビを点けてもテストパターンが映るだけだった。機材を休ませるためだったらしいが、別に不便も感じなかったし、つまらない番組を垂れ流すよりよほど賢明だ。受信機の方も、長時間点けていると画像が乱れてくるのでちょうどよかった。

癪なことに、画像の乱れはいつもいいところでやってくる。慌ててツマミを回しても元に戻らず、腹立ち紛れに側面を引っぱたくと直った。当時は同じ区内の羽田空港を離着陸する飛行機が陸も飛んでいたため、その度に轟音と共に画面がひどく乱れた。こちらは大抵いい場面ですらなり、テレビをたたいても仕方ないから、やり過ごすよりなかった。今の衛星放送でも大雨の時には同じような現象が起こり、意外に進歩が無いなど当時を思い出しながら苦笑いだ。テレビ放送に昼休みが無くなった直後に始まった、シルバーオックス提供のフジの『テレビ名画座』も、同じ映画を毎日放送するという当時ならではの放送形態だった。確か、うた続きを翌日というような謳い文句で、通勤時間帯のように時刻の表示が出ていた覚えがある。後に月曜から水曜に1本、木金に1本の週2本となって、結構長く放送していた。洋画の定時枠も、これが最初だったと思う。

初めにナレーションの解説があり、予備知識を持ってじっくり観ることができた。子どもには長過ぎると感じた映画もこのシステムのおかげで分けて観ることが可能となり、難解なヨーロッパの映画などは、繰り返し観てようやく理解できた作品もあった。同じように見えた西洋人も、アメリカとヨーロッパではこうも違うものかと教えられもした。

この時代ならではといえば、NHKの公開番組『お笑い三人組』で、こんなこともあった。2人しか出てこないで変だなと思ったら、誰かの奥さんが重病だか危篤だかで、それを知った他の2人が無理やり帰してアドリブで持たせたのだと後で聞いた。観客も承知していたそうで、麗しい美談である。

僕もこうした空気に直に触れたことがあった。東京オリンピックの直後ぐらいだったか、親戚のお兄さんに誘われて、クイズ番組の公開放送の観客としてTBSを訪れた。

ロビーのテレビでやっていた番組がつまなかったので回そうとしたら、チャンネルが6に固定されていて回らない。いい機会だからと勝手に「見学、させてもらったが、とがめられることもなく館内をひと回りし、何人もの知っているタレントとすれ違った。時間が来てホールへ入る際には、耳を自在に動かす特技で有名だったE・H・エリックと遭遇した。

場内では何度か拍手をする練習をさせられ、こういう番組の拍手が自然発生でないのがわかってちょっとしらけたものの、本番ではいつもモノクロで観ている司会者の高橋圭三やセットの色も新鮮で、和気あいあいとした楽しいひと時を過ごした。記念にももらったスポンサーのマルハの鉛筆は、使い掛けのまま家のどこかにまだ持っているはずだ。

後年、いくつかのテレビ局を仕事で訪れることになるが、そのほとんどが移転や建て替えを経て、当時の面影を残す所は少ない。NHKが現在の場所に移転したのも東京オリンピックのころだ。「朝ドラ」と「大河、(とはまだ呼ばれていなかったが……)」も既に始まり、国民的二枚目スターの長谷川一夫がテレビで初主演した『赤穂浪士』が大人気だった。翌年の『太閤記』には秀吉に緒方拳、信長に高橋幸治と新人2人が起用され、視聴者から「信長を殺すな!」という声が殺到して2か月延命されたという逸話がある。

実は高橋は別の役だったのだが、初挨拶の際に勘違いして「信長役の高橋です」と言って拍手が沸いたため、引っ込みがつかなくなって、まあいいや、となったらしい。高橋は次の年の朝ドラ『おはなはん』でもまた多数の助命嘆願が寄せられ、その後も大河を含めた多くのドラマで活躍するNHKお気に入りの俳優となった。いわばケガの功名で、以前はこのように現場担当者の裁量の幅が広く、いろいろな実験や可能性を試すことも容易だった。

アーカイブスなどで当時のドキュメンタ



少年時代の筆者と自宅のテレビ

リーを観ると、ピリピリした緊張感が漂いマスコミとしての使命感も伝わってくる。ところが、テレビの影響力が増すにつれ、ドキュメンタリーやニュースに対して抗議や圧力を受けるケースが散見されるようになる。ドラマも同様で、表現や描き方、さらにはモデルを巡って度々問題化した。実在の団体を実名で描き、大騒ぎになったこともある。「このドラマはアクションです……」のおなじみのテロップも、そうした経緯から生まれたものだ。

局側に非のあることも少なくなかったが、行き過ぎとも思える苦情にまで神経をとがらせるようになり、次第に自主規制という守りの姿勢が強まっていった。多少のことは大目に見られていたテレビも青年期を過ぎ、それなりの分別が求められる段階に入ったということだろう。その一方で視聴率競争の激化から、いわゆる低俗番組が生まれ、視聴者の目も厳しくなって、ちょっとした手違いにも寛容ではなくなっていった。視聴者との距離も近くなっているように見えて、実はどんどん遠くなっている。

さまざまな制約と視聴率の狭間で、日々番組を作り続けていくのはさぞ大変だろうなと思う反面、昨今は目に余ることも少なくない。デジタル放送になって技術的には向上しても、肝心の番組内容がおろそかになっては意味がない。テレビと共に育ってきた僕としては、今後が大いに気になるところだ。

今回は、②教科書だったアメリカのドラマ(American dramas)を予定している。

#### 著者:千蒙豹一郎

作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。著書に『法律社会の歩き方』(丸善)『スクリーンを横切った猫たち』(ワイス出版)の他、『東京新聞』、『猫生活』(緑書房)『ミステリマガジン』(早川書房)をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。

#### \*当書DVD版は、月刊FDI編集部にて\*

本文:108ページ/映像:2分23秒  
2012年9月 ミリアムワード(株)発行  
価格:1,980円(送料・税込)



# 昭和30年代の 僕と日本の少年時代 備忘録 for iPhone



あの日、未来は明るかった——。  
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う  
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、  
高度成長期の東京が  
いきいきと甦ります。

ケーシー先生や力道山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の絵柄の馬肉100%コンビーフや怪しい溶けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。



## 付録ムービー

### テレビ・芸能

1. テレビの青春時代
2. 教科書だったアメリカのドラマ
3. プロレスと力道山
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
5. コマソンの女王 楠トシエ

### 家電

6. 電気釜の憂うつ
7. カラーテレビ狂想曲
8. リモコンテレビが欲しい!
9. クーラーをつけたまま寝ると死ぬ!?
10. ポラロイドカメラ
11. 可愛いフジペットカメラ
12. 8ミリフィルム

### 食

13. モナカカレーと「少年ジェット」
14. アメリカンドッグ事始め+レモネード
15. ハンバーガー開拓史
16. スパゲティは炒める物?
17. 謎のフトルミン
18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ
19. 粉末ジュース盛衰記
20. 傑作! 噴水型ジュース自販機
21. 10円アイスクリームが花盛り
22. 消えたガムつれづれ

### ホビー

23. 鉄の手裏剣
24. 2B弾とクラッカー
25. 銀玉鉄砲の王道

### 26. 輝くマテル

27. 黒かった金属製のモデルガン
28. プラモデル熱中時代

### 社会・文化

29. ケネディの時代
30. 外車変遷記
31. 国産車は酷惨車?
32. サンドイッチのような車の三角窓
33. デパートはワンダーランド!
34. 町の映画館
35. 折りたたみ式コップ
36. 月刊マンガ誌と付録
37. ペラペラのソノシート

著者：千葉 豹一郎

作家・評論家。日本刑法学会、ペット法学会会員。

著書に『法律社会の歩き方』(丸善)『スクリーンを横切った猫たち』(ワイズ出版)の他、『東京新聞』、月刊『猫生活』(緑書房)『ミステリマガジン』(早川書房)をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、近年は草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



\*当書DVD版は、月刊FDI編集部にて\*

本文：108ページ／映像：2分23秒  
2012年9月 ミリアムワード(株) 発行  
価格：1,980円(税込)

株式会社ユニワールド 東京都世田谷区松原2-34-9

TEL.03-5376-7233 FAX.03-5376-7246 info@uni-w.com